



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3941 号 2017.10.6 発行

### NHK・Eテレが「攻めてる」と言われるようになった理由

ダイヤモンド・オンライン 2017年10月6日 編集部

「Eテレの攻めてる番組」として評判の「ねほりんぱほりん」は好評につき10月4日（水）からseason2が放送開始。第1回の「少年院の経験を持つ夫婦」に続き、10月11日（水）に放送される第2回のテーマは「元サークルクラッシャー」。サークルや職場の中で複数の相手と恋愛し人間関係を崩壊させる女性「サークルクラッシャー」。かつて大学のサークルで7人の男性と次々関係を持ち、男同士が大げんかするなど騒動を起こした女性がゲスト。たくさんの男性をもてあそんだその先には、離婚や子どもとの別れなど壮絶な人生が待っていた…。男をその気にさせる驚きのテクニックも大公開！自分の存在価値や居場所を恋愛に求め生きてきた女性の人生に迫る。



かつてはお堅いイメージの「教育テレビ」だったNHK・Eテレが、昨年あたりから「攻めている」とメディアで取り上げられるようになった。いったい、Eテレにどんな変化が起きているのか？そこで、「攻めてる番組」の象徴とも言える「ねほりんぱほりん」チーフ・プロデューサー、大古滋久氏に続き（詳しくは『最近攻めてるNHK・Eテレの象徴「ねほりんぱほりん」責任者に聞く舞台裏』参照）、昨年6月からEテレの番組編成責任者を務める、熊野御堂朋子編集長に話を聞きに行ってきた。



#### NHKの中で一番“弱小”のEテレをどう編成するか

—最近「Eテレが攻めている」と注目されることが多くなっています。

熊野御堂朋子（くまのみどう・ともこ）／NHK Eテレ編成局編成主幹（編集長）。1986年にNHK大阪放送局に入局。東京への異動後は、福祉番組や教養番組などのディレクター、プロデューサーを務める。制作局青少年・教育番組部を経て、2016年6月から現職。これまでに手掛けて印象に残っている番組は、シリーズ療育の記録「姉と兄に見守られて」（第21回日本賞グランプリ受賞）、ETV特集「ビッグインタビュー ヴィクトール・フランクル 夜と霧を越えて②それでも人生にイエスと言おう」、プライム11「ようこそ私の世界へ“自閉症”ドナ・ウィリアムズ」。

熊野御堂 ええ。それはもちろん嬉しいことです。でも、この1～2年で急が変わったわけではなく、長い時間を掛けて変わってきたんです。たまたま、「ねほりんぱほりん」や「バリバラ」<sup>(※)</sup> など目立つ番組が出てきたことで、注目度が高まっているんだろうと思っています。

ただ、この間ちょっとびっくりしたことがあったんです。今年3月に「Eテレのブラン

ディング調査」というのを行なったのですが、そこで出てきた今の「Eテレ」に対するイメージが、人に例えると、「30代の中性的な人物、IT系、デザイナー、クリエイター」、「自由、柔軟、個性的、チャレンジャー、多様な価値観、癒される」。それが15~20年前の「教育テレビ」に対しては「おじさん、演歌歌手、公務員」「地味、保守的、一方通行、近づき難い」だったんです。Eテレに対する視聴者の方のイメージが、これだけ変わっていたことにすごく驚きました。これは現場のアイディアの一つひとつが積み重なってこんなにも転換したんだなあ！とつくづく思っています。私たち、Eテレがやろうとしていることは間違っていないと信じていいんです、と現場にも伝えました。

—実際には、編成の責任者である編集長として「Eテレ」をどんな局にしたい、という方針を持っているのでしょうか。

**熊埜御堂** Eテレは、今NHKにある4波（地上2波、BS2波）の中で、予算的にも一番「弱小チャンネル」なんです。でもだからこそ、個性際立つ番組やコンテンツを並べたい、そこでは負けないぞ！と頑張ってやっています。

（※）2012年にスタートした障害者のための情報バラエティー番組。笑いの要素を織り交ぜタブー視されてきたテーマにも挑んできたが、2016年4月から、障害のある人に限らず「生きづらさを抱えるすべてのマイノリティー」の人たちにとっての“バリア”をなくすための番組に進化。

**熊埜御堂** Eテレの視聴者層は、下はゼロ歳から、上は80歳、90歳を超えるくらい幅が広いんです。これだけ幅広い層に向けていますから、番組のジャンルも多種多様です。なので今年からキャッチフレーズを変えました。去年までの数年間は「知らないってワクワク」だったのですが、今年からはちょっと角度を変えて「見つかるEテレ」。多種多様なジャンルの中から、あなたにとって、「いい！これは見たい！」というものが見つかるチャンネルになりたい、「あなたのいいね！（Eね！）を見つけてください」という思いを込めて、「見つかるEテレ」に変えました。

あとは、今の時代、ありとあらゆるメディアが出てきて、テレビの相対的な価値が下がってきていると言われていています。いろいろなことで暇つぶしができから「なんとなく」ではテレビを観てもらえなくなっているんですね。

そういうときに、「わざわざ観たくなる」とか「観るだけで終わらない」とか、「参加する」「体験する」「役に立つ」「勇気づけられる」、そうした付加価値、プラスアルファの何か感じてもらえるようなチャンネルになりたい、ということはずごく意識しています。

—「ねほりんぱほりん」や「香川照之の昆虫すごいぜ！」といった“攻めてる”Eテレを象徴するような番組制作を担当されている大古プロデューサーに話を聞いたときに、「NHKの中でもEテレは（総合やBSに比べて）大振りができる」と言われていたんです。編成側として、そういう環境作りをしようと考えて意識されているのでしょうか。

**熊埜御堂** 今までEテレ、かつては教育テレビという名称でしたが、制作側から「こういうことはできないんじゃないか」と思われているところはあるんです。例えば、総合テレビでは、緊急事態が発生すればすぐ編成を変えて対応しますが、Eテレは、いつでも変わらない番組が流れている、と捉えられてしまっていたり。

確かに基本的にはそうなんですけど、でも、何かあればEテレだって編成変えるぞ、と私は思っています。それは総合が扱うような事件・事故ではなく、Eテレなので人々の興味・関心の分野です。

最近でいうと、将棋の藤井聡太くんが注目された対局で、EテレがNHK杯初の生放送をしたのですが、「それなら、これまで将棋を知らなかった人たちにも楽しんでもらえるような特番を、生放送の前日に入れられないかなあ？」と将棋番組の担当者に言ってみたら、「え!?やっぴいんですか!?やりたいです！」と。そうやって自分たちで規制を掛けてしまっているところもあるんですね。だから、「やりたいことを言ったら実現するかも」という雰囲気は醸し出すように心掛けています。

—そういう環境が「攻める番組」作りをしやすくしているのかもしれないですね。

**熊埜御堂** ただ、先ほどもお話したとおり、私が劇的に何かを変えたわけではなくて、

Eテレは長い時間を掛けて変わってきたということがあるんです。例えば、語学番組などは、昔のすごくキチっとした講座から、タレントさんを起用するなど今はもうガラリと変わっています。いろいろなところで時代に合わせた試行錯誤は続けられてきていて、その流れのなかで、今、「ねほりんぱほりん」や「バリバラ」といった目立つコンテンツが出てきたタイミングだったのかな、と思います。逆に言うと、際立ったコンテンツが一つでも二つでもあると、これだけ全体が変わるんだと思いますね。

### **Eテレ編集長が通す企画、通さない企画**

—Eテレの編集長として、通す企画の基準というのはどんなものでしょうか。

**熊埜御堂** 何かに照らし合わせて決める、というわけではないです。企画書を読んで「これいける」と思えるかどうか。今、これをやることによってEテレ全体にプラスになるかどうか、というところを意識します。その他細かく言えば、今この企画をやる理由がはっきりしているかどうか、今まで見たことのない要素・新しい組み合わせ・仕掛けが入っているかどうか。あとは、一発屋で終わらない、2回目、3回目と続けていける仕組みが備わっているかどうか。そんなところを見て判断しますので、決める理由は番組によって違います。

—企画は通りやすいんですか？ 通りにくいんですか？

**熊埜御堂** 結構、通る確率が高いと思いますよ。それに、今は特にEテレ全体で“好循環”が起こっていると思います。いろいろと目立つ企画が出てきて、それを見て「こんなことできるんだ！」と現場が勇気をもらって「自分も何か考えて実現してみよう」と思い始めている。新しい番組も、みんながちゃんと観ていて、「こういう風に攻めるやり方があるんだったら、私だったらこうしたい」と他の現場をすごく刺激している感じがあります。だから新しい企画、提案も増えてきています。その好循環を生んでいる現場に感謝しているところです。

—Eテレで「通らない企画」というのはどんなものでしょう？

**熊埜御堂** ……面白くない、に尽きますね（笑）。視聴者として観たときに。

### **“攻める発想”を生み出す現場にするには？**

—「斬新なアイデア」「面白い発想」の企画が制作側から上がってくるよう、編集長として制作現場に対して意識していることはあるのでしょうか。

**熊埜御堂** プロデューサーから提案がきたときに、なるべく、潰さないようにしていますね。実現できるための種を見つけてあげたり、その種をどうしたら育てていけるかというアイデアをこちらからもなるべく出して現場に持ち帰ってもらったり。「編成としてはこういう切り口だったら行けるかもしれない」という実現につながる方向性を提示します。

プロデューサーやディレクターが企画の説明に来てくれるときは、そのときに初めて企画書を読むことも多いのですが、まずはとにかくちゃんと話を聞くんです。そして、基本的にはどうやったら番組になるか、もっと面白くなるか、こんな演出はできないか、こんな出演者はどうか、など、相当率直に思ったことをそのまま伝えます。

時には私の妄想がすごく膨らんでしまって「こんなことを（制作現場にいない）私が言ってもいいのかな」と思うことがあっても、自分の中でその思いが強ければ、「例えばだけど」と前置きしつつ、番組の演出やメッセージ、期待したいことをいろいろしゃべります。

そうすることで、もしかしたら相手は「そういうこともアリなんだ」と思うかもしれないし、そこから固まっていたアイデアが動き出して、いろんな可能性を考え出してくれるかもしれない。そこに期待して率直にしゃべります。そうできるのも制作現場のディレクターの思い、というのを私は信じているからこそ、ですが。常に、最善で、最新で、面白いことはどういうことなのか、自由に考えてもらえる状況を作りたいと思っています。

### **Eテレだからできること**

—NHKには総合、BSもありますが、特にEテレだからできること、というのはどんなことでしょうか？

**熊埜御堂** 今の時代、総合的な、マスを狙うってすごく難しくなっていると思うんですよ。“みんな”を相手にしていくというのは、すごく迷うし、戦略を立てるといっても、1000万人を相手に何かするというのは非常に難しい。

逆に、人の興味がすごく細分化していますよね。「自分がここで勝負したい」と思う部分もすごく細分化してると思うんです。

Eテレが目されるようになったのも、実はそこが関係しているんじゃないかと。Eテレの番組はすごく細分化されているし、ターゲットがはっきりしているので、みんながそれぞれに「私はこれが好き」というのを見つけてSNSなどで発信してくれるから、そういう形で話題にしてもらいやすい。そういうターゲットがはっきりしているものを作るのは、Eテレだからできることだと思っています。本当はもっと細分化してきたいくらい。ただ、細分化といっても決して、マニアックになるのではなくて、「本物」にこだわりたいとは思ってるんですけどね。

—逆に、Eテレならではの難しさはありますか？

**熊埜御堂** やっぱり、予算、ですかね。「Eテレが攻めている」と話題にさせていただいても、突然「攻める予算」が付くわけではないので（笑）。

—今のEテレだと、「Eテレだから出たい！」という出演者もいるのではないかと思います。

**熊埜御堂** タレントさんの中には、普段出していない一面を出せる、ということで面白がってくださる方も確かにいます。あとは最近、一流のクリエイターの方がEテレで子どものために番組を作りたいと言ってくださるケースが増えてますね。きっとみなさん、いろいろな場所で活躍されて、大人に向けていろんなことをやり尽くしているので、「クリミティブな、子どもたちの発想を料理したい」というところがあるんだと思います。

あとは、制作のほうで、外のプロダクションとか関連団体のディレクターなど、普段は違うところで勝負している人たちが「これをやるならEテレかも」とアンテナが動いて、わざわざアポを取って会いに来てくれることがすごく増えました。私たちにとっても可能性が広がるし、視聴者にとっても新しいコンテンツとの出会いにつながると思うので、そういうことが増えたのはとても嬉しいです。

—今後はどのように攻めていきますか？

**熊埜御堂** まだまだ未開拓のジャンルがたくさんありますし、好循環といっても、その流れはまだ始まったばかりなので、一つひとつ、視聴者も刺激するような新しいコンテンツを考えていきたいと思います。

昆虫好きの俳優の香川照之さんがやってくださっている「香川照之の昆虫すごいぜ！」も人気ですが、この番組をやってみて発見したのは、何かの分野の“熱量”を持っている人ってこんなに可能性があるんだなあ！ということ。もちろんあれは、プレゼンターとして香川さんが一流だっていうこともありますけれど、観ている方は「昆虫が好き」だから観ているだけではなくて、香川さんのあの昆虫を追い求める熱中ぶり、熱量が好きなんですよね。みんなあれにヤラれちゃってると思うんですよ。そういう「熱量」の分野ってもっと開拓できるんじゃないかな、と。

「ねほりんぱほりん」も、視聴者の方の間で巻き起こった熱量が支えてくださったんです。先ほど、細分化、という話をしましたが、それとは別に、「熱量」というところでもっと掘り出せる、攻めていけるものがあるんじゃないかな、と思っています。

（聞き手・構成／ダイヤモンド・オンライン編集部 山出暁子）

「なら・いけばなフェスティバル」7日開幕 約190点展示、障害者体験教室も 奈良  
産経新聞 2017年10月6日

県内の生け花作家らの作品を一堂に展示する「なら・いけばなフェスティバル」が7日、開幕する。例年、県華道会が展覧会を開催しているが、今回は第32回国民文化祭・なら

2017、第17回全国障害者芸術・文化祭なら大会参加のイベントとして盛大に開催される。

会場は県文化会館（奈良市登大路町）と東大寺（奈良市雑司町）で、計約190点のいけばなや絵画、花器が展示される。

また、期間中の7日午前10時半からは「障害者いけばな体験教室」、8日午前11時から「親子いけばな体験教室」がいずれも県文化会館で開かれる。

県華道会の松村翠英理事長は「今回は高校生や障害のある方も参加してくれ、たくさんの作品があります。紅葉した秋の素材をふんだんに使った作品を楽しんでほしい」と話していた。観覧は無料。

### 再就職障害者126人で半数超え 倉敷・事業所閉鎖から2カ月余

障害者の再就職状況	決定	A型事業所	89人	126人 (56.3%)	9月末時点	
		B型事業所	7人			
		一般就労	27人			
		その他(自営など)	3人			
	未決定	再就職先の見学・面接	56人	82人		
		ハローワークに相談中	26人	(36.6%)		
	すぐに再就職しない			16人		(7.1%)
	計			224人		

山陽新聞 2017年10月6日  
倉敷市内で障害者の就労継続支援A型事業所が閉鎖し、多数の利用者が一斉に解雇されて2カ月余りたった。岡山労働局によると、一斉解雇された障害者224人のうち、次の就労先が決まったのは9月末時点で126人（56・3％）と閉鎖から2カ月で半数を超えた。内訳は、障害者が事業所と雇用契約を結ぶA型事業所に89人、結ばないB型事業

所に7人、一般就労に27人、自営などに3人だった。

再就職できても職場になじめているかも課題で、ハローワークは障害者就労の支援機関と連携して職場訪問するなど定着に向けた指導をする予定。3人を雇用した倉敷市内にある縫製会社の社長（56）は「再就職はゴールではなく新たなスタート。私たち雇用主はさまざまな障害の特性への理解を職場全体に広げる責任がある」と話している。

### 障害者の在宅就労を仲介 神戸市が支援機関を開設



神戸新聞 2017年10月6日  
事業を説明するプロップ・ステーションの竹中ナミ理事長（右）と神戸市の三木孝保健福祉局長＝神戸市役所

神戸市は5日、同市東灘区の神戸ファッションモール内に、障害者の在宅就労を後押しする総合相談支援機関「しごとサポートICT」を開設した。障害の種別を問わず、データ入力やホームページ作成など、在宅でできる仕事を企業から受け、能力に応じて振り分

ける「仲介役」を目指す。情報通信技術（ICT）を活用した就労支援に特化した機関を、行政が設置するのは全国でも珍しいという。

事業は、1991年から障害者の就労支援を続ける社会福祉法人「プロップ・ステーション」（同市東灘区）に委託する。同法人は既に、全国の企業から紙資料のデータ化などパソコンを使った作業を引き受け、通勤や職場での仕事が困難な障害者らに提供。企業から同法人、同法人から障害者へと報酬を支払う形で、在宅就労を進めている。

同市の三木孝保健福祉局長は「支援機関を作ることで、多様な働き方を進めたい」と説明。同法人の竹中ナミ理事長（68）は「障害のある人の親は、自分の死後、子どもが自立してやっていけるかが一番心配。人とのコミュニケーションが苦手でも、イラストなど



で才能を発揮する人もいる。年齢は問わないので、まずは相談してほしい」と話す。

相談無料。神戸市内の障害者対象。プロップ・ステーションTEL 078・845・2263（平日午前9時～午後5時半）（上田勇紀）

## 国会出席拒まれた、ALS患者の岡部さん 共生社会へ論戦を



東京新聞 2017年10月6日  
どのような障害者政策を進めるのか各党に議論するよう求める岡部宏生さん＝東京都江東区で（稲岡悟撮影）

衆院選（二十二日投開票）では、社会保障制度のあり方が重要な争点だが、障害者政策を巡る論戦は今のところ脇に追いやられている印象は否めない。昨年、衆院厚生労働委員会で障害を理由に出席を拒否された、筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者で日本ALS協会会長の岡部宏生（ひろき）さん（59）は「人にやさしい社会を実現するために、どのような政策を進めるのか論戦してほしい」と期待を寄せる。（城島建治）

「バリアフリーが進めば、障害者は街に出やすくなる。そこで健常者との交流も生まれる」

岡部さんは、二〇二〇年東京五輪・パラリンピックに向けて、健常者と障害者が一緒に暮らせる共生社会を実現するため、交通インフラなどのバリアフリーを進めるとした安倍政権の方針を評価した。

一方、障害者の権利を守る障害者差別解消法が一六年四月に施行された後も、障害者に対する差別的対応が相次いでいることについて、岡部さんは「（バリアフリー推進だけでは）お互いの理解は進まない」と指摘する。障害の種類や程度をその人の個性として受け入れることが、社会の共通認識として必要と訴える。

自身が国会出席を拒否された経験について「質疑に時間がかかるなどの理由を挙げられ、ショックだった」。ALSなどの難病患者は、医療費負担などが増えているケースが少なくない。「経済効率性を優先する安倍政権の姿勢を見ていると、私たちは『社会の重荷』と言われている気がしてしまう」

「障害者が暮らしやすい社会は『人にやさしい社会』。それは高齢者が住みやすい社会でもある。どう実現するのか、各党は根本的な論戦をしてほしい」と指摘。「選挙が終わっても続けてほしい。国民一人一人が考えるきっかけになるはずだから」と訴える。

<国会出席拒否問題> 衆院厚生労働委員会は2016年5月、入院中の難病患者らにヘルパーの付き添いを解禁するなどの障害者総合支援法改正案を巡り、岡部さんを参考人招致したが、「質疑に時間がかかる」として一転、出席を拒否した。国会運営を巡る与野党対立が背景にあった。批判が殺到し、渡辺博道委員長（自民）が岡部さんに謝罪。参院厚生労働委は岡部さんが出席して質疑した。

ALSは全身の運動神経が侵されて筋肉が縮み、次第に動かなくなる難病。岡部さんは声を出せないが、五十音が書かれた文字盤を視線で追い、考えを伝えることができる。本紙のインタビューは、ヘルパーが通訳し行われた。

## 気管切開、戸惑わないで 医療的ケア児親向けサイト 共同通信 2017年10月5日

病気や障害で呼吸がうまくできず、のどに穴を開ける「気管切開」が必要な子どもを持つ家族のために、国立成育医療研究センター（東京）が総合情報サイト「子どもの気管切開なび」を開設した。手術方法やたんの吸引など医療的ケアの仕方、生活の留意点などを写真とともに分かりやすく紹介している。

気管切開などで医療行為が日常的に必要となる「医療的ケア児」は近年増加傾向にあるが、子どもの気管切開に関する情報はインターネット上にもごくわずか。「声が出せなくなる」などといった誤解から混乱する親も少なくなく、正しい情報を届けようと耳鼻咽喉科医長の守本倫子さんが提案、監修した。

## 県内自殺者6人増、86人 1～7月 対策協、市町と連携強化



佐賀新聞 2017年10月6日  
7月までの自殺者数が前年同期を上回っていることが報告された佐賀県自殺対策協議会＝佐賀市のグランデはがくれ佐賀県の今年1～7月の自殺者数は86人で、前年同期に比べて6人増えていることが、5日に開かれた県自殺対策協議会で報告された。減少傾向にあった年間の自殺者数が増加に転じる恐れがあり、県は「自殺は個人の問題ではなく、多くが追い込まれた末の死」という視点で市町との連携を強化し、対策を推進する。

年代や性別、市町別などの詳細は公表されていない。2012年は年間で213人だった県内の自殺者数は年々減少し、16年は3割減の147人だった。

協議会の委員からは、生活困窮やうつ病への対策に加え、「大人の発達障害」に視点を置いた支援の必要性を訴える声が続いだ。「周りの空気を読みづらい特性がある人たちが生きづらさを抱え、自殺リスクが高くなっている。社会で支援できる環境づくりを」「診察まで数カ月から半年待たなくてはいけない状況の改善を」との意見が出た。

この日は、市町の首長や市町担当者が参加する「県自殺対策トップセミナー」もあった。

## 社説 <'17衆院選>消費税使途変更 社会保障が縮まないか

中日新聞 2017年10月6日

安倍晋三首相は消費税率を10%に引き上げた際の増収分の使い道を変更し教育へも投入すると表明、自民党の公約にも掲げた。だが、使途が拡大すれば社会保障費が削られないか心配になる。

首相が打ち出した幼児教育・保育の無償化や高等教育の負担軽減策を歓迎する声は少なくないだろう。その時に必要な政策に優先順位を付け財源を充てる。その判断は一見、当然に見える。

首相は、高齢者に手厚い社会保障の給付を教育や子育てにも回す必要性を説明した。その財源に二兆円を使うと言う。

増税は慎重であるべきだし、増収分の使い方にも疑問が湧く。

増収分の使途は、旧民主党政権下の二〇一二年に自民、公明の三党で合意した「社会保障と税の一体改革」で決めた。税率を5%から二段階で10%まで引き上げ、増収分を社会保障の充実と赤字国債で賄っている社会保障費の“借金”返済に回すことにした。

首相は財政健全化に回す分を使う考えだが、それでは新規に赤字国債を発行することと同じになる。現役世代が負担を引き受け、将来世代に回さないことが三党合意の核心だ。これでは次世代にツケ回す構造は変わらない。

増収分の使途は消費税法に年金、医療、介護、少子化対策の社会保障四分野に使うことが明記されている。これに教育を加えると使途の「拡大解釈」を許すきっかけになりはしないか。

幼児教育・保育が無償化されても、そもそも保育所に入所できなくては支援策とはならない。待機児童対策が最優先のはずだ。子育て支援の財源は税率10%時に七千億円を充

てる予定だが、対策の緊急性から既に同額を投入している。それでも足りない状況だ。教育に財源を振り向けても待機児童対策の財源を確保できるのか。

疑問はまだある。

一体改革には医療・介護の費用を一兆二千億円削ることも盛り込まれている。既に給付減や負担増が始まっている。首相は社会保障費の自然増の抑制を「これからも続ける」と述べた。財政健全化が遅れば、この分野の費用をさらに削る事態になりかねない。

首相は少子高齢化を「国難」と言い、使途の見直しが必要と言うのならこうした疑問にもしっかりと答える責任がある。

希望の党は増税の凍結を公約に掲げる。ならば社会保障の将来像や財源確保策を語るべきだ。

## 社説:補助犬法15年 なぜ、まだ拒否するの

中日新聞 2017年10月6日

身体障害者補助犬法の施行から十五年。盲導犬や聴導犬、介助犬と暮らす障害者の自立と社会参加を後押ししようと定められた。だが、残念ながら受け入れ拒否が絶えない。理解をもっと広げたい。

不特定の多くの人々が利用する交通機関や飲食店、ホテル、病院といった公共性の高い場所に補助犬の受け入れを義務づけている。二〇〇二年十月から施行された。

一定規模以上の事業所は、補助犬同伴での勤務を拒めないとの規定も途中に入った。

補助犬は盲導犬のほか、聴導犬、介助犬の三種類。聴導犬は呼び鈴や電話、警報機など多様な音色を聞き分け、聴覚障害者に知らせ、誘導する。介助犬は指示された物を持ってきたり、脱衣を手伝ったりと肢体不自由者を支える。

そうした重要な使命と役割を担っているのに、まるでペットのように拒絶される事例が相次ぐ。

例えば、昨年三月には、金沢市のタクシー運転手が盲導犬を連れた男性の乗車を拒んだ。車内が汚れると思ったという。国土交通省は道路運送法の引き受け義務違反で、タクシー会社に行政処分を出したが、ほんの一例にすぎない。

二年前、NPO法人日本補助犬情報センター（横浜市）が尋ねたら、法律を説明しても同伴を拒否された経験があると答えた人は四十七人中三十一人、66%に上った。障害者の暮らしの手段という意識がまだまだ乏しいようだ。

とはいえ、昨年四月から施行された障害者差別解消法は、補助犬の同伴を理由にサービスを拒否したり、制限したりすることを差別として禁じた。もはや人権の問題として捉え直さねばならない。

国によれば、四月現在、盲導犬は九百五十頭、聴導犬は七十五頭、介助犬は七十一頭を数えた。十年前に比べ、盲導犬はほぼ横ばいだが、聴導犬は六倍、介助犬は二倍に増え、需要が伸びている。

補助犬は福祉サービスとして無償で貸与されるが、一頭の育成に三百万～五百万円程度かかるという。育成団体は多くを寄付金に頼っていると聞く。安定供給に向け、公的支援を厚くしたい。

補助犬の使用者は、胴輪などにその旨を表示し、認定証と公衆衛生上の安全性を示す健康管理手帳を携帯し、求められたら提示せねばならない。周りに迷惑を掛けないよう重い責任を負っている。

東京五輪・パラリンピックには、世界各国から補助犬が来日するに違いない。快く受け入れることができる社会でありたい。

